
怪盗と科学者

雛花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗と科学者

【Nコード】

N0313W

【作者名】

雛花

【あらすじ】

快哀、快志の短編集。

名前と声（キ＋哀）（前書き）

キ＋哀。ある夜の出来事。

名前と声（キ＋哀）

月が空に浮かび、綺麗に輝いている。

そこで、あまり見かけない組み合わせの2人がビルの屋上で話している。

「名探偵じゃなくて、貴女が来るとは……、流石に私も驚きましたよ」

白い衣装の怪盗が言います。

「あら、ごめんなさいね。彼はまだ貴方の暗号が解けないみたいよ」

クールな少女が言います。

「へえ、あの名探偵がね。で、貴方は私を捕まえますか？」

「クスッ。捕まえたいところだけど、同じ犯罪者として見逃してあげる」

少しの沈黙。

「え？ どういうことですか？」

「なんでもないわ」

「気になります」

「中森警部呼ぶわよ」

「それだけは勘弁してほしいです。……それにしても貴女に敵う気がしませんよ」

「あら、怪盗さんがそんな簡単に諦めていいのかしら？」

「……やっぱり、貴女には敵いません」

「……ねえ、私の前でわ、そんな紳士のような話し方しないでいわよ」

「あ、ありがとう。結構辛いんだよね……」

怪盗の性格がガラリと変わった。

「なあ、哀ちゃん。俺も素の俺を出すからさ、哀ちゃんも素直になりなよ」

「え？」

「……哀ちゃん、工藤のこと好きなんだろ？」

「そんなわけないわよ」

「怪盗をなめたらだめだぜ。哀ちゃん」

「……」哀ちゃん”って言うの止めてくれる？ 寒気がするわ」

「えー。俺は可愛くていい名前だと思うよ」

「とにかく、止めて」

「じゃあ、」

と言い、怪盗は少女に背をあわせて、耳もとにより、「コナンの声色を使って、

「哀」

と言った。

「!?!」

少女は見事に動揺した。

頬が少し赤く染まっていた。

怪盗は無邪気に笑っている。

「やっぱり好きなんですよ?」

「……そうよ……」

と、小さく少女は言った。

「俺は素直になったほうが可愛いと思うぜ。 工藤もわかってる
筈。 俺、哀ちゃんのこと応援してるから」

と怪盗はそれだけ言い残し、空へと飛んで行った。

「馬鹿ね……。 素直になれるなら、もうなってるわよ。 彼に
は私と正反対の明るくて元気で真っ白な彼女がいるもの……」

彼女は小さく呟いた。

月はそんな彼女を悲しく照らしていた。

名前と声（キ＋哀）（後書き）

コ哀新志集と快哀快志集で分けました。

気持ちと変化 No.1 (快志) (前書き)

快志。連載もあるけど元はこっち。

気持ちと変化 No.1（快志）

深夜、私は眠れなくてベランダに行った。

風が吹いてるが、寒いわけではない。

春の訪れをすごく感じる。

星空が広がり、満月が輝いている。

1人になると、思い出してしまう。

工藤君と蘭さんが仲良く街を歩いている姿を……。

工藤君は私には見せたことのない笑顔を蘭さんに向ける。
蘭さんもとびきりの笑顔で答える。

絵にかいたような仲のいいカップル。

私が入る隙間なんてこれっぽっちもない。

こんなこと考えたくないのに。

その時、ふと空に白い鳥が見えた。

と思ったら、その白い鳥はベランダに降り立った。

「こんばんは、お嬢さん」

それは白い鳥ではなく、怪盗だった。

白いタキシードを着て、銀のモノクルをつけ、シルクハットをかぶっている、今世間を騒がせている怪盗キッドがいた。

「なんのようかしら？」

「ようは特にないです……」

彼は最近毎日のように私の家に来る。

目的は知らない、聞いても教えてくれないし。

「じゃあ、帰ったら？」

「冷たいんですね」

「ええ、悪い？」

「でも、私は貴女が優しいことを知っていますよ」

声は工藤君そのもの。

だから、そういうことを言われると嬉しかったりする。

「あら、ありがとう」

一応、お礼は言っておく。

「どうして、貴女はいつも、いつも辛そうなんですか？」

「別に、辛くなんかないわよ」

「知ってますか？ 顔の表情は嘘をつかないんですよ」

図星をつかれて、私はうつ向く。

「人生笑っていないとつまらないですよ」

彼はそう私に言う。

「笑えないわよ、私の人生は最悪。何もかも思い通りにいかない」

「そろそろ、教えてくれませんか？ 貴女が何に悩んでいるのかを」

そう言えば、彼は毎日これを聞いてきた。いつも適当に流していたけど……。

まあ、悩みを話すのも悪くはないのかもね。

「恋の悩み」

「恋、ですか？」

「あら、おかしいかしら？」

「いいえ。それでどんな悩みなんですか？」

おかしいわね、なんで私こんなこと話しているのかしら？

「私ね、工藤君のことが好きなのよ」

「名探偵のことが、ですか」

「でも、彼には好きな人がいるのよ、とても可愛い天使のような子が」

彼は黙って私の話を聞いてくれた。

どうして、こんなに優しいのかしら？

「貴方も知ってる通り、私はあの2人を引き離した本人、だから私には幸せになる権利はないのよ……」

「権利、ですか……」

「何よ？」

「幸せには権利なんてものはないんですよ。誰だって幸せになっ
つていいんです」

「どうして？」

彼はいつものように不敵に笑った。

「理由なんてありません」

「え？」

「貴女が幸せになってはいけないなんて、誰が言いましたか？」

幸せは権利ではなく、自分で見つけるものですよ」

その言葉で私は救われた。

この私が幸せになっ
ていい。
本当に？

「でも、私は犯罪者だから、」

「だからなんですか？」

「えっ？」

「罪を償う気持ちはあるんですよ？」

「ええ」

「なら、いいじゃないですか。私だって幸せになりたいと思いますよ」

「あら、好きな人でも、いるのかしら？」

「もちろん、いますよ。一生手が届かない存在ですけどね」

少し悲しげな表情でこっちを見た。

「教えてくれないの？ 私は教えたのに」

「そうですね、時期がきたら、教えますよ」

天下の大怪盗も恋をするのね……。

「私、工藤君に気持ちだけは伝えることにするわ」

「いいですね、それも」

「今日はありがとう」

「私は貴女の悩みを聞いて良かったですよ」

そう言って、白いハンググライダーを広げ、空に飛び立とうとした。

私は彼に質問をした。

「最後に1ついい？」

「ええ」

「貴方、何歳なの？」

彼は夜空に飛び立つ前にチラッとこっちを見て言った。

「貴女とお似合いの17歳ですよ」

気持ちと変化 No.2 (快志) (前書き)

快志。 続き。

気持ちと変化 No.2（快志）

次の日の夕方5時頃私は工藤君の家に向かった。

私のこの気持ち、伝えたい。

やっぱり、気持ちを伝えないままだと後悔するし、後に引きずってしまっから。

インターホンを鳴らす指が震える。

緊張？ 私らしくないわね……。

インターホンのボタンを押す。

『……はい、工藤です』

数秒後彼の声がインターホンから聞こえた。

「工藤君、私」

『ああ、宮野か、開いてるから入っていいぞ』

インターホンが切れた。

私は言われた通りドアを開け、家に入った。
彼がいると思われるリビングへ行った。
彼はソファアールに座って本を読んでいた。

「よお、宮野。とりあえず、座れよ」

そう言われたので、私は彼と向かい合わせになるようにして反対側のソファアールに座った。

「今、コーヒー入れるから」

「いいわよ、話終わったらすぐ帰るから」

「そっか」

言うんでしょ？

はやくしないと、今日言わないと一生言えない気がする。
だから……。

「……私、工藤君のことが好き」

「え？」

彼は驚いていた。

いきなり好きなんて言われたら驚くわよね。

「……そっか。俺はお前も知ってる通り、蘭が好きなんだ、ごめんな」

わかってた。

こうなるって、でも、やっぱり辛いわ。

「でも、お前のことも好きさ。相棒として」

彼の笑顔は今だけ私に向けての笑顔。

それが嬉しい、それと同時に嫉妬も生まれた。
この笑顔は蘭さんのものの……。

「ありがとっ、気持ちは伝えたかったの」

なんか泣きそう……。

「でも、俺お前のこと好きだった頃もあった。
お世辞じゃねえからな」

「え？」

そう言って、少し照れる彼。

「そう、嬉しいわ」

笑顔で返す。

そうよ。

いいじゃない、彼が私のことを好きじゃなくても。
工藤君に悪気はないのだし。

「用も済んだし、私は帰るわね」

「おう、お前はいつまでも俺の相棒だからな」

「ありがとう」

私は彼の家を出た。

それから、すぐに私は自分の家に駆け込み、地下室に籠った。
ベッド寝転がり、枕に顔を埋める。

涙を流したくない。

だから、私は耐えた。

工藤君との思い出を振り返らないようにした。

泣きたくないの、涙を流すと、弱くなりそうだから。

「ありがとう、工藤君」

気持ちと変化 No.3 (快志) (前書き)

快志。 最終話。

気持ちと変化 No.3 (快志)

深夜、私は眠れなくてベランダに行った。

1人になると思い出してしまいそう。

工藤君のことを……。

好き、好き、大好き。

だけど、貴方には好きな人がいる。

もう、気持ちは伝えたのだから、吹っ切らないと。

そして、今日も白い鳥がベランダに降り立った。

「こんばんは、お嬢さん」

「こんばんは、怪盗さん」

何を話せばいいのかしら？

工藤君にふられたって言うの？

そんなこと言ったら私、確実に泣くわね……。

「……その様子からすると、駄目だったんですね」

「ええ。意外とズバツと言うのね」

「あ、すいません」

「大丈夫よ」

少し傷ついたけど。

「大丈夫なわけありませんよね？」

「どうして？」

「どうしてって、好きな人にその、ふられてしまったんですよ…」

…」

少し遠慮気味に言う彼。

「私だったら、耐えられませんね、その悲しみや悔しさには……」

「……っ」

ええ、耐えられないわよ。

でも、泣きたくないの、だからあまり考えたくない……。

「貴女も辛いはずですよ。 どうして、そうやって我慢するんですか？ 泣いていいんですよ、泣きたい時は」

どうして優しくするの？

「っ私は泣きたくないの」

泣きたくないのに……。

泣きたくないのに、涙目になってくる。

「そんな辛い顔を私は見たくないんです」

私がそう言う優しい言葉に弱いことを彼は知っているのかしら？

私の涙を止めていた涙腺が壊れた。

「っ、私は泣きたくないのよおお！！！」

言葉とは裏腹に涙が流れて来た。

止まらない、止めたいのに……。

泣いてしまっ、泣きたくないのに……。

「泣けんじゃん」

彼の言葉使いが普通の高校生になった。

これが彼の素なのね。

「泣、きたく、ないっのに……」

「いいと思うけど？ 涙は嫌なことはなんでも流してくれるからな」

なんでも？

私の苦しみも、辛さも、悲しみも、全て？

「っ……、うっうっ」

私は顔を手で覆った。

と、彼が私に近づいて来た。

彼は私を抱き締めた。

私の顔は彼の胸に埋まった。

一瞬の出来事だったので、私には拒否する暇もなかった。

「ちよっ」

「何も考えなくていい、泣けばいい」

……、温かい。

今日だけは私の全てを彼に預けて、甘えてもいいわよね？
悲しみの後くらいには……。

「っう、好きなのに、……工藤君のこと、なんで、どうして……」

涙が止まらない。

さっきまで堪えていた分、今涙が流れ流れ止まらない。

今、全部流してしまおう。

苦しみ、辛さ、悲しみ、全て。

彼は私の頭をポンポンと優しく叩く。

安心する。

工藤君に抱き締められたらこんな感じなのかしら？

それから何分経っただろう？

私は全てを流して落ち着きを取り戻した。
彼はずっと抱き締めていてくれた。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

そう言っても彼は私を離そうとしない。

「ねえ？ もう大丈夫なんだけど……」

離そうとするとどころかもっと強く抱き締めてくる。

「……実はさ、俺、志保がふられたって知ったとき、嬉しかった」
「え？」

「酷い男だろ。でも、俺は志保が好きだから」

「今、なんて？」

私の耳がおかしいの？

「俺は志保のことが好きなんだ」

彼は私のことを好きと言った。
どうして？

「なんで？」

「好きになるのに理由はない。好きなんだよ、どうしようもないくらい」

「私は工藤君のことが、」

「わかってる、でも、俺は志保が苦しんでる姿を見たくないんだ」
そう言って彼は私を見つめる。
顔が近くてドキドキする。

「1週間チャンスをくれ。1週間で俺は志保を落としてやる」

その言葉にドキッとする。

「ええ、いいわよ。受けてたつわ」

ニコッと笑う。

「っ、その笑顔は反則だろ。俺がもっと落ちてくよ」

赤い顔をして言う彼。

私、もう落ちかかってるかも。

「そう言えば、私まだ貴方の名前聞いてないわよ」

私がそう言うと彼は笑った。

「俺の名前は、黒羽快斗。よろしくな」

s p e c i a l d a y と ク ロ ー バ ー (新 ↓ 志 ↑ 快) (前書き)

快斗の誕生日話。

s p e c i a l d a yとクローバー（新↓志↑快）

「ああ、憂鬱な天気……」

俺の口から漏れたのはそんな言葉だった。
外は雨が降っていてジメジメした空気だ。梅雨の時期は憂鬱で仕方がない。

そして、もう一つ憂鬱なのが――、

「うわっ。俺の誕生日に雨降るとかマジ最悪！ 神様許さねえ」

さっきからこんなことしか言っていない黒羽。
正直、こいつの誕生日なんてどうでも良かった。

「酷いと思わねえ？ 新ちゃん」

俺にそんなこと振るなよ。

「黒羽の日頃の行いが悪いからじゃね？」

「いや、そんなことはないっ！　だって俺怪盗止めたし」

「いやいや、でもその前は怪盗やってただろ。そう言っただけでやめたか
ったが、言わなかった。どうせ変な言い訳で言い返されるだろう
から。」

「あーあ。せっかく志保ちゃんとデートしようと思ったのに」

“志保ちゃん”という言葉に俺の耳はすぐさま反応した。

「は？　志保とデートの約束なんてしたのかよ？」

「そりゃもちろん！」

ニカツと歯を出して笑う黒羽に少々イラツときた。まだ俺だって
デートしたことねえのに。

「黒羽君、嘘付くのは止めなさい」

声をする方を向くと志保が立っていた。

蒸し暑くてジメジメした気候だからか、最近の服装は露出度が高
い。胸元を出しすぎだ。すごく嬉しいことだが、あまり他の奴に見
せたくないんだよな。特に黒羽には……。

てか、黒羽嘘付いたのかよ。信じたじゃねえか。

「あ、志保ちゃん！ おはよう」

「はよ、志保」

「おはよう」

軽く挨拶を交わして志保はソファに座る。隣に黒羽が強引に座る。その向かい側に俺。この座る配置には文句を言いたい。

「志保ちゃん、今日も美人だね」

「あら、ありがとう」

毎日こんな台詞。俺はもう聞き飽きた。

「志保、今日もすげえ美人だぜ？」

だから俺も負けじとそう言う。こんなことが日常茶飯事。志保も飽きただろう。

「ねえ、志保ちゃん。今日何の日か知ってる？」

「スナックの日、だったかしら？」

「へ？」

志保って変な所で天然だよな。これは黒羽、傷付くぜ。

「志保ちゃん、本気で言ってるの？」

「ええ」

ああ、残酷だぜ、志保。

「新ちゃん、俺死にたい」

「バーロー。そんなんでいじけんなよ」

でもその気持ちは分からなくない。確か三日前くらいに黒羽が教えてたし。

「嘘よ」

クスッと志保は笑った。俺の頬は赤く染まる。何照れてんだよ、俺。

「今日は黒羽君の誕生日、でしょ？」

志保がその言葉を言った瞬間、黒羽の顔は一気に明るく晴れ渡った。

「志保ちゃん！ 愛してるっ！」

バツと黒羽は志保に抱きつこうとしてたが、志保はすんなりとかわした。

「さすがに、昨日言われたことは忘れないわよ」

昨日も言われたのか。しつこいんだよな、黒羽は。

「俺、本当に幸せだわ」

「そう」

好きな奴に誕生日を覚えて貰えただけで幸せになれるなんて、本当に幸せな奴だよな。

と言うか、こいつ絶対に俺のこと忘れてるよな。志保のことしか見えてねえから。

「ねえ、プレゼントは？」

「何が欲しいの？」

黒羽は即答した。

「志保ちゃんが欲しい」

だから、俺も即答してやった。

「死んでもあげねえ」

黒羽は凄い形相で睨み付けてきた。

「なんでだよ。新ちゃんのケチ！」

ケチで結構。絶対に誰にも志保は渡さねえ。死んでも手離なさねえ。

「工藤君、その口ぶりはまるで私が貴方の物みたいじゃない。いつから私は貴方の物になったのかしら？」

「あ、いや……。まあ、良いじゃねえか！」

「良くないわよ」

そう言うズバッてくる言葉は俺の心をすげえ痛めるんだよな。

「だよね！ だから、志保ちゃん。俺の物になって？」

ニコニコ笑って志保に言い寄る黒羽が苛立たしくて仕方なかった。

「そうね、考えておくわ。誕生日プレゼントが私だなんてお金を使わずに済むし」

おい。何を考えてんだ、志保は。そんなにお金が恋しいのか？

「誕生日プレゼントが志保ちゃんだったらもう一生何もいらない！」

本当、幸せな奴だな。欲が無さすぎる。志保がいれば良い、か。
俺も同じようなもんだよな。

「で、新ちゃんは何かくれるの？」

「あ？」

「怖い。新ちゃん」

いや、だって俺がお前にあげる義理なんてねえし。だいたい、俺の誕生日はレーズンパンしか貰ってねえぜ？

「そうだな。魚で良いか？」

「ノーセンキュー！ 新ちゃん、俺を殺す気！？」

「いや、魚を見て怯えるお前を見たい」

「なんか言い方が変態っ」

変態はお前だろうが。

「あ、じゃあ、今日の夕食は魚料理ね」

「えゝ！？」

志保がフツツと笑った。小悪魔ってこういうのを言うんだよね？

「ちなみに、私と付き合うことになったら毎日魚料理よ？ それでも良いの？」

うーん、と黒羽は本気で悩んでいた。大好き物と大嫌いな物が一緒に付いてくるから悩んでるんだろうな。

黒羽、心配すんな。志保がお前と付き合うことはねえから。

「それでも俺は志保ちゃんと付き合う！」

やっぱり愛の力が勝ったようだ。俺だって志保と付き合えるなら毎日レーズンパンでも構わない。

改めて愛の力の凄さを感じた。

いつものようにたわいもない話を永遠に話しているといつの間にかお昼過ぎ。

そして、外を見ると、

「あ、晴れた！」

さっきの曇り空が嘘だったかのように青空が空一面に広がっていた。

「神様！　ありがとう！」

神様許さないんじゃないのかよ？

「本当、綺麗な青空ね」

「志保ちゃんほどじゃないよ」

暇さえあれば黒羽は志保を口説いている。効果は残念ながらゼロに等しい。

「晴れてるからピクニック行かねえか？」

黒羽が急にそんなことを言い出した。

「たまにはそういうのも悪くはないわね」

お弁当作らなくちゃ、志保は楽しそうにそう言って台所へ向かった。

「あいつ、良く笑うようになったよな」

あの頃の闇が全て消えたわけではない。でも彼女は今の人生を楽しんでいる、そう思える。

「新ちゃんのお陰かな？」

「……だったら良いな」

俺はふつと微笑んだ。

*

俺らは志保の作った弁当を持って良く来る景色の良い丘に来た。

雲一つない青空が広がっていて、とても気持ち良い。

「あー、気持ち良い！」

黒羽は両腕を上にはばす。

「そうね」

志保は持ってきたレジャーシートを広げ、その上に座る。

「弁当食べようぜ！」

三人仲良くレジャーシートに座り、弁当を出して食べ始めた。

「青空の下で食べると、いつもよりもっと美味しく感じるな」

唐揚げを頬張りながら黒羽が喋ると、食べながら喋らないで、と志保から注意されていた。

「ああ、そうだな」

つい最近までは幸せなんて全然感じていなかった。だから、今の時間が本当に幸せでいつまでもこのままであつて欲しい。

「ね、志保ちゃん。あーんってやって？俺が食べさせてあげる」

「おい、黒羽。調子乗んな！」

こいつはほんとくと何を仕出かすか分からないから怖い。

「嫌よ」

志保はそう言った。そうだよな、良いよなんて言うわけないもん
な。

「でも、逆なら良いわよ?」

志保はとんでもないことを言い出した。何を考えてるんだか。

「本当に!?」

「絶対ダメだ!」

「新ちゃんは黙ってて」

黙ってられるかよ? 絶対に許さねえし。

「黒羽君には特別に焼き魚を作ってきたの」

「え?」

なるほど、そう言うことが。

「好き嫌いはダメよ、黒羽君?」

「……は、はい」

そして黒羽は魚を食べる決意をしたらしい。

「はい、あーん」

本当、小悪魔だよな。いや、むしろ悪魔だ。何となくこいつらのやりあいが面白く見えてきた。

志保は箸で搦んだ魚を黒羽の口まで運ぶ。もちろんその箸は今まで黒羽が使ってたものだ。

それを黒羽は少し苦しみながらも飲み込んだ。

「良くできました」

志保はニコツと笑った。

やれば出来んじゃない、とすごく思った。

「志保ちゃんの味がする」

なんて黒羽が馬鹿なことを言い出した。志保の味ってなんだよ？

「あら、ありがとう」

ああ、本当に幸せてこれと言ったよな。

みんなが笑って生きる。

俺がずっと願っていた世界。

*

青空を眺めながら三人で話していたらいつの間にか時間が過ぎていった。今はもう青空ではなく、綺麗な夕焼け空。

志保ちゃんと2人きり。

工藤には飲み物を買って来いと命令したからここにはいない。

「……で？ わざわざ2人で話すようなことがあるの？」

「もちろん、大有り！」

ずっと言いたかったことがあるんだ。

「俺、志保ちゃんのこと好きだぜ」

「何回も聞いたわよ」

「だけど、志保ちゃんには幸せになって欲しい」

それが俺の一番の願い。

「……工藤と付き合うなんて俺は認めたくねえよ？ でも、志保ちゃんの幸せを願うから。だから、俺のことなんてほっといて、工藤と付き合って良いんだぜ？」

別に間違ったことだなんて思っていない。工藤に志保ちゃんを取られるのはすごい悔しい。でも、これが正しい答えなんだ。

「その言い方だと私が工藤君を好きみたいに聞こえるわよ」

「実際そうだろ？」

「気のせいよ」

「俺にくらい、素直になってくれよ」

工藤には嘘を付いてばっか。嘘ばかりだと辛いだろ？ だから俺には嘘付くなよな？

「本当、優しすぎよ、貴方……」

「ありがとう」

優しすぎるのは志保ちゃんだぜ？　だって、俺に気使ってんだろ？　だから工藤と付き合えない、そうだよな。

「だから、な？　もうちょっと素直になれよ。空回りしてる工藤が見てて可哀想だぜ」

そう言ったら彼女微笑んだ。

「そうね」

綺麗だぜ。何よりも。

「買ってきたぜ！」

前の方を見ると工藤がこっちに向かって叫んでいた。

「志保ちゃん、素直になりなよ」

小声でそつと耳打ちした。

そして工藤が来た方向に向く。

「ほらよっ」

工藤は500ミリリットルのペットボトルをこちらに投げてきた。

俺の大好きなレモンティーだった。

「サンキュー」

あ、それと、と工藤は言って志保ちゃんを手招きしていた。そして2人で並んで俺を見た。

「な、何だよ？」

「俺と志保からの誕生日プレゼントだ」

急すぎてすごく嬉しかった。

手渡されたのは“K”の字が彫ってある小さなハート型の青色のキーホルダーだった。

「俺と志保とお前とお揃いのキーホルダーだぜ？」

そう言って工藤と志保ちゃんはポツケから俺と色違いのキーホルダーを取り出して、俺に見せてきた。

工藤のは赤色の“S”と彫ってあるキーホルダー。

志保ちゃんのは黄色の“S”と彫ってあるキーホルダー。

「お前のKは快斗のK。志保のSは志保のS。俺のSは新一のS」

工藤の説明を聞きながら手渡されたキーホルダーを眺めた。

「これはね、繋ぎ合わせると三つ葉のクローバーになるのよ?」

「三つ葉?」

四つ葉の方が良いに決まってるじゃないか。なのに、どうして?

「なんで四つ葉じゃないのかって思っただろ?」

「あ、ああ」

そしたら工藤はもう一つキーホルダーを渡してきた。お揃いで何も彫ってないピンク色の物。

「お前にいつか恋人が出来たら、それにイニシャルを入れて渡してやれ。お前が恋人見つけるまで、俺らの四つ葉のクローバーは咲かないぜ?」

恋人、か。妙にプレッシャーかかるだろ、その言葉。

「一緒に幸せを咲かせましょう?」

志保ちゃんが綺麗に笑う。

俺はなんて良い友達を持ったんだ。
必ず、この恩は返すから。

「ああ」

会えるかな。志保ちゃんよりも好きになれる人に。会えたら、二度と離さない。

この仲間の証のキーホルダーを渡してやる。

「黒羽、」
「黒羽君、」

2人で微笑んで俺に言う。

「誕生日おめでとう」

俺も微笑んだ。

「ありがとう」

キーホルダーが綺麗に輝いていた。

俺の心も――。

誕生日、それは1年に一度だけのspecial day。

ラフ・メイカーと泣き虫少女（快哀）（前書き）

快哀。 B U M P O F C H I C K E N の曲。

ラフ・メイカーと泣き虫少女（快哀）

——貴方のことが、好きなの。

——ごめん。お前のことは大事だけど、俺には蘭がいるから。

儚く散った私の初恋。

期待なんてしてなかった筈なのに。
ふられるって覚悟していたのに。

どうして、この涙は流れるの？

どうして、この涙は止まらないの？

*

コンコン、とノックの音が涙で濡れたこの部屋に転がってきた。

誰にも会えない顔なのに。もう、何よ。

「…………どちら様？」

窓の外に広がる闇からうつすら見えたのは白い影。そこに居るのが誰かなんて簡単に予想がついた。

「怪盗、キッド？」

夜中にやって来る白い影なんてこの怪盗しか居ないだろう。一体なんの用なのかしら？

「いつもなら怪盗と名乗りますが、今日ばかりは、違う名前で名乗らせていただけますか？」

窓の外から響いてくる声はどこか工藤君に似ている。だからもしかしたら工藤君が私を元気づけるために来てくれたのかも、なんて…………。あるわけないのにね。

「ラフ・メイカー。そう呼んでください」

窓越しに見える怪盗さんの笑顔。

「貴女に笑顔を持つてきました。寒いから入れてくれませんか？」

彼がふざけてるわけではないことは分かっていた。だけど、余計なことはして欲しくなかった。1人に、して欲しかった。

ああ、駄目。このままだと自分を抑えられない。貴方を責めてしまっつ。

「ラフ・メイカー？ 冗談じゃないわよ！ そんなもの、呼んだ覚えはないわ・・・」

お願いだから、そこに居ないで。

「……私に構わないで、消えて頂戴。そこに居られたら、泣けないでしょ」

今日だけは、泣かせて。お願いだから、泣かせて。長いこと涙が溜まってるから。全部、流してしまいたい。

「……1人に、して」

白い影は見えなくなった。

悲しい筈なのに。私が消えてって言ったのに。どうして、こう

やっ
て胸が締め付けられるの？

＊

コンコン、とノックの音が大洪水のこの部屋に飛び込んできた。

窓の外を見ると、また白い影。
あの人、まだ居たのね。

「まだ居たの？ 消えてって言ったでしょ？」

そしたら、ラフ・メイカーは窓の外で座り込んでしまった。

「そんな、悲しい言葉言わなくても良いだろ？」

「は？」

「そんな言葉言われたのは生まれてこの方初めてですよ。哀しくな

つてきました」

ラフ・メイカーは今にも泣きそうな声で言ってきた。私を笑わせに来たんじゃないの？

「……ど、どうしよう？　泣きそうなんだけど」

急に素の自分に戻り、そう呟いた。ああ、この人について行けない。笑わせに来たんじゃないのかしら？

「貴方が泣いてたら仕様がないでしょ？　泣きたいのは、私の方よ」
貴方の相手をしているのも疲れるわ。貴方なんて、呼んだ覚えはないのに。

工藤君に来て欲しい、なんて馬鹿なことを考えている私が腹立たしい。

2人分の泣き声遠く。

*

ドアを挟んで背中合わせ。怪盗さんの存在を感じつつも、抑えられない感情が溢れ、しゃっくり混じりの泣き声になる。

膝を抱えて背中合わせ。泣き疲れた私と彼。

それでも、止まらない。ああ、私はいつの間にかこんなにも彼を好きになっていたのか。

「ねえ。まだ私を笑わせるつもり？」

背中越しだから見えないが、多分涙を拭っていた。それから喋る。

「勿論。それだけが生き甲斐なんだよ。笑わせないと、帰れねえ」

本当にそうなのだろうか？ 怪盗なんだから怪盗をやっているならば生き甲斐を感じられる筈なのに。何だか分からない。

分からなくて、当然だけど。

*

今では貴方を部屋に入れても良いと思えた。随分時間が経って、

涙も枯れてきたし。寂しいからかもしれない。この数時間の間に貴方を知りたくなった。それよりも、工藤君に良く似た顔で、声で、慰めて欲しい。

ドアを開けようとした。

こっちからは開かないみたい。溜まった涙の水圧かしら？

「ねえ、そっちからドアを開けてくれない？ 鍵ならもう開けたから」

さっきと変わらぬ態勢でそう言った。

「ちょっと、怪盗さん？」

そう呼び掛けても、返事がない。

「何か返事してくれない？」

無言で、何も帰ってこない。沈黙の時間だけが淡々と流れていく。

どうしたのかしら？ まさか・・・。

後ろを振り返るとそこにいる筈の怪盗さんは、

居なかった――……。

「……所詮、そんなものよね」

私を助けてくれる人なんていない。みんな助けようとはするけど、私の冷たい態度を嫌って私の周りから居なくなってしまう。隣にいて欲しいとどんなに願ったって叶わない願いなの。

悲しい？ そんな感情、当の昔に捨てたのに。

一人で生きていくの。仲間なんて、友達なんて、居なくても……。

……居なくても？

いつの間にか私の目に熱いものが込み上げてきた。さっきたくさん流したばかりなのに。

今更、ラフ・メイカーは私を1人置いて消えてしまった。信じた
私がいけなかったの？

バリッ——！

窓ガラスの割れた音がしたのはさっき怪盗さんがいた窓とは逆の
方向。

——やっぱり、信じることで悪くない。

「おめえに笑顔、持ってきた！」

涙で顔がぐちゃぐちゃで、だけど笑顔なラフ・メイカーが鉄パイプを持ってそこに立っていた。

ポケットから彼は小さな鏡を突き付けてきて、一言。

「おめえの泣き顔、笑えるぜ？」

そこに映っているのは目の前にいる彼と同じように涙でぐちゃぐちゃの顔の私。

呆れた……。だけど、なるほどね。

「ふふっ」

笑えた――。

*

ポンッ！

彼が指をパチンと鳴らすと、薔薇の花が現れた。彼お得意のマジックだ。

「哀ちゃんに涙なんて似合わないぜ？ 笑顔でいないとな」

そのためには人の力が必要なのよ？ 私を笑わせてくれる。いや、工藤君を思い出さなくらい私を幸せにしてくれる人の力が必要なの。

「じゃあ、貴方は私の隣にいて、私を幸せにしてくれるの？」

図々しいのなんて百も承知だ。だけど、人付き合いが苦手な私にはそうすることしか出来なかった。

だけど、彼は笑顔で……、

「それが俺の本望だ」

そう言った。

工藤君と同じで貴方も優しいのね。

私の手の甲に彼は軽く口付けをした。これが始まり。

「これからよろしくね、怪盗さん?」

笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志) (前書き)

新志↓快志。 新一死ねた。 バッドエンドじゃない筈。

笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）

俺の最近の楽しみはこの家にある推理小説を読むこと。その有意義な時間に俺の集中を妨げる人がやってきた。

「新一、宿題やったのか？」

「もう終わったし」

俺の読んでいる本を覗いてきた。

「推理小説ばっか読んでんだな」

「だってこの家にたくさん置いてあるから。父さんのだろ？」

「・・・まあな」

この人は俺の父さん。

俺と顔がほとんど同じ。子供は親に似るというけどどこまで似るとはびっくりだ。

「あらあら、新一はまた推理小説読んでるのね」

声がした方を見る。まあ、声だけで誰か分かるんだけどな。

「母さん」

俺の母さんは自慢が出来るほどの美人。昔の写真を見たりするけど、今とほとんど変わっていない。

「志保ちゃん、お帰り」

「ただいま」

そうやって2人で笑い合う。

「母さん、お腹空いた」

「はいはい。黒羽君、手伝いなさい」

「へいへい」

俺は本当に幸せな家庭に生まれたと思う。毎日笑顔が絶えない。親同士も仲が良く、喧嘩したところなんて見たことがない。

ただ、俺の家庭は普通と違う。

俺の名字は『工藤』。母さんの名字も『工藤』。この家の表札も『工藤』。だけど、父さんの名字だけ『黒羽』なんだ。

それに父さんは母さんを『志保ちゃん』と呼び、甘えていて、母さんは父さんを『黒羽君』と呼び、何だかよそよそしい。

昔、母さんにどうしてか聞いたことがあった。だけど、答えてくれなかった。その時の母さんの瞳は悲しい色をしていた。

それでも幸せだから、何も考えることはない。そう考えてこの14年間を過ごしてきた。

ごはんが出来たと呼ばれて、リビングまで行く。電気がついてなくて、真っ暗だった。

そしたら、いきなりパーンと大きな音が鳴り、電気がついた。

「誕生日おめでとう、新一」

それで鳴ったのはクラッカーだと分かった。

そういえば、今日誕生日だったけ。

「ありがとう、父さん、母さん」

自慢の親で、口では言えないけど、大好きな親。いつも俺のことを考えてくれて。

「ほら、新一の好きなレモンパイ焼いたわよ」

「よっしゃ！　すげえ嬉しいっ」

レモンパイは小さい頃からの俺の大好物。良く母さんが作ってくれて食べていた。

昔からの思い出は確かなものだけだ。

たまに父さんは本当の父さんなのかと不安になったりする。母さんの悲しい瞳が脳裏を過る。

きっと2人には何かあると思う。俺の知らない過去だ・・・

気になるのは昔の写真で見た、父さんとそっくりな男。父さんとも母さんとも友達だったらしい。だけど、あまり2人はその人の話をしたがない。名前すら教えてくれない。

聞いてみようか・・・

*

「父さん、話がある」

父さんの部屋に行った。椅子に座っていたがこちらに身体を向けた。

「・・・新一。話ってなんだ？」

「なんで、父さんだけ名字が違うんだ？ 母さんと父さんには何か俺に隠している秘密があるのか？」

「新一は父さんに似て、推理力があるんだなあ」

そう言ってふっと悲しく笑った。もう隠し通すのも限界か、そんな感じだった。

「・・・分かった。話すさ。そろそろ教えるべきだと思ってたしな」

*

黒ずくめの組織を潰してからすぐ、新一と志保ちゃんは付き合い

始めた。

俺は志保ちゃんのことを好きだったけど、新一という志保ちゃんは幸せそう。だから俺は諦めた。

3人で仲良く毎日過ごしていた。2人の仲を邪魔するつもりはなかったけど。志保ちゃんといえなかったから。

それから1年後、2人から告げられたのは結婚すること。嬉しい反面、悲しくもあった。今までは志保ちゃんは付き合っているだけで、縛られてるわけではなかった。でも結婚となると完璧に志保ちゃんは新一のものになってしまう。

我儘だけど、俺はそれが嫌で……

志保ちゃんの唇を奪って、そのまま抱き締めた――

いけないことだと分かっていたけど。自分の気持ちを抑えきれなくて。志保ちゃんが困った顔をしていたのは知っていた。だけど、それでも……欲しかったんだ。志保ちゃんの温もりが。

その後で本当に最低なことをしたと気がついた。罪悪感で押し潰され、眠れない夜もあった。だけど、志保ちゃんは優しくった。そんな俺に笑顔を見せてくれた。

やっぱり好きだった、志保ちゃんが。

それからまた1年後……

「志保に子供が出来たんだ！」

新一からその報告を受けた。

「本当か！ 志保ちゃんがお母さんになるってことか。良かったな」

「良かったよ、本当に」

そう言って笑う新一は、愛する妻を思っ瞳をしていた。もう父親の顔だ。

「子供の名前とか決めたのお？」

「んー、まだ。でもやっぱり、女の子だったら『あい』とかが良いかなって」

「あー、灰原哀を引きずるわけね」

「言い方悪いな。なんて言うか、忘れないように？」

「じゃあ、男の子だったら、『コナン』にするの？」

「・・・それは可哀想だよな」

『工藤コナン』考えたら可笑しくて2人で笑った。子供の名前の話で随分と盛り上がった。

「ただいま」

そして我らが姫の登場だ。

「おっ！ お帰り、志保」

「お邪魔してます、志保ちゃん」

「あら、黒羽君」

「子供出来たんだってね。おめでとう」

「ありがとう。笑い声が聞こえてきたけど、2人で何話してたの？」

「ああ、子供の名前何にしようかなってさ」

「ふふふ。気が早いわよ、あなた」

無邪気な笑顔が可愛らしかった。その笑顔で『あなた』と呼ぶ志保ちゃんの顔が頭から離れない。

「志保、今日の夜ごはん何？」

「ハンバーグよ。黒羽君も食べていきなさい」

「やった。ありがとう、志保ちゃん」

志保ちゃんが自分のものではないことが悔しいし、悲しいけど、

幸せだから。

だけど、闇はすぐ側に迫っていた――

「新一が倒れた・・・？」

もう泣きじゃくって声にも鳴らない声で志保ちゃんから電話がかかってきた。

すぐに走って病院に向かった。

「新一っ！」

病院に着くと一目散に新一の病室に向かった。志保ちゃんはベッドの隣に目を赤くして座っていた。

「．．．くろば、くん」

「新一は大丈夫なのか．．．？」

しかしベッドに横になる新一を見るだけで大丈夫じゃないことが分かった。

「．．．もう、駄目なの」

「え？」

「工藤君、ただでさえ免疫力が低いのに、強い病原菌にやられて。直す薬はあるんだけど、それを工藤君に投与したら、死んでしまうの。かといってこのままだと病に蝕まれて死んでしまう」

「．．．．．そんな」

新一が死ぬ？ 有り得ない。あいつが志保ちゃんを置いて先に逝ってしまふなんて。

「私、工藤君の身体に投与しても大丈夫な薬を作る」

志保ちゃんの決意の瞳は力強かった。

俺も医師に新一の容態を聞いた。相当危険な状態らしい。後何日持つかも分からないらしい……。

志保ちゃんはそれから病室に現れず、博士の家の地下室にこもり、出てこなかった。ずっと研究をしている。

3日後、本当に心配になって志保ちゃんの元を訪れたら……

「志保ちゃんっ」

床に倒れていた。

止めて欲しい。俺の近くにいる人ばかりが倒れていくなんて。

「大丈夫？」

「・・・大丈夫、夫よ」

大丈夫な筈なのに志保ちゃんは強がって笑顔を見せる。目元には隈ができていた。

「志保ちゃん、寝てないでしょ？」

「……寝てられないわよ。工藤君が死ぬかもしれないのよ？ 私が頑張らなきゃ。工藤君が死んだら、私……」

そこまで言うと言志保ちゃんはまたパソコンの前に座り、キーボードで書き込んでいく。

「無理は止めろ、志保ちゃんっ。お腹の中には赤ちゃんもいるんだぞ?」

肩を掴むと、志保ちゃんに無理矢理それを弾かれた。

「止めてっ。1人にして。もう嫌なの。私のせいで人が死ぬのが!」
もう、志保ちゃんの決意を揺るがすことはできなかった。

その次の日、俺は病院に行った。新一はまだ眠ったままで。

「おい、新一。志保ちゃんが心配してるんだぜ? 起きろよ。お前は死ぬような奴じゃねえだろ?」

新一が死んだら、志保ちゃんの笑顔が消えてしまいそうで。新一の死より、志保ちゃんから笑顔がなくなることが怖い。

「……………んっ」

ベッドに横になる新一が目を開けた。

「新一っ!」

「くろば…」

「待ってる。今、志保ちゃん呼ぶからっ」

携帯を取りだし、電話をかけようとした。しかし、新一に携帯を取り上げられた。

「．．．呼ぶな．．．」

すぐにでも無事を彼女に伝えたい筈なのに。どうして。

「．．．俺はもう無理だ。自分でも分かる」

「新一．．．」

新一が諦めるとはよっぽどなことだ。

「見られたくないんだ、志保に死に際を」

「でも、志保ちゃんは．．．」

「期待させたくないんだ」

新一は悔しそうにそう言った。本当は新一だって志保ちゃんを置いていきたくないんだ。

「なあ、黒羽．．．」

夢い瞳で新一は俺を見た。

「志保と子供を、よろしくな」

それが最後。

ニコツと笑ったかと思ったら、新一は目を閉じた。それはもう開くこともなく――

それからすぐだった。薬が出来たと志保ちゃんが病室に入ってきたのは。

志保ちゃんは、泣かなかった……

俺はこの時決意した。志保ちゃんを支えろと。新一の代わりでも構わない。たとえ志保ちゃんがまだ新一を愛していても。

新一の家に行くと、ソファーに座って写真を見ている志保ちゃんがいた。

「志保ちゃん．．．」

隣に座り、その写真を覗く。もちろん、結婚式での新一と志保ちゃんのツーショット。

「黒羽君、私、どうしたらいいの？ もう分からないわ」

「ねえ、志保ちゃん。聞いて欲しいことがある」

志保ちゃんがこちらを向く。俺はその瞳を見つめる。

「．．．俺、支えたいんだ。形だけで良い。俺を今志保ちゃんのお腹にいる子供のお父さんにして欲しいんだ」

少し膨らんできたお腹に優しくて手を当てた。

「．．．そんな、良いの？」

「俺がそうしたいの。だから、お願い。もう志保ちゃんを1人にし
たくない」

「黒羽君．．．」

背中に腕を回し、彼女の顔を自分の胸に埋める。

「だから、泣いて。涙を我慢する志保ちゃんなんて嫌だ」

きつく抱き締めた。罪悪感なんて勿論あった。だけど、彼女を支えたくて。

「うあああああああ！」

叫び声のように大きな声で泣き崩れた。
いつもの冷静な志保ちゃんはいなくて。亡くなった夫を思う志保ちゃんしかいなかった――

「くどう、くん・・・」

我を忘れた志保ちゃんはその名前ばかり口にする。

「アイツはもういない」

死んだんだよ。工藤新一は。

「嘘よ。工藤君はずっと一緒にいるって約束したの。貴方が工藤君でしょ？」

「残念だけど、俺は黒羽快斗だ」

工藤新一にはなれない。

「そんな・・・」

「現実を受け止める、志保ちゃん」

受け止めるなんて、残酷な。

「嫌、イヤ、いや・・・」

嫌でも、これが現実なんだ。

ねえ、もう志保ちゃんの笑顔は見れないの・・・？

「工藤君のいない世界なんて、有り得ない」

止めて。そんな悲しいこと言うのは。
笑って。前みたいに、無邪気にさ。

「・・・死にたい。私は1人だから」

恨むよ、新一。志保ちゃんがこんなにも新一のことを愛していたから、だからこんなにも志保ちゃんはこの世界を嫌っている。

「バーロー。1人なんかじゃねえ、俺がいるだろ、黒羽快斗が」

だから、お願い。

笑って――

「・・・ありがとう、黒羽君」

志保ちゃんは、笑った――

その笑顔を見てほっとして一粒の涙を流したのは俺。

それから俺は志保ちゃんを支え続けた。その甲斐があつたからか、志保ちゃんと新一の子供は無事に生まれた。

「志保ちゃん、おめでとう」

「ありがとう。黒羽君のお陰よ」

生まれた赤ちゃんは男の子だった。生まれたての赤ちゃんを抱くと、その重みを身に染みて感じた。

「．．．新一にも抱かせてやりたかった」

「そうね」

そう言つて遠くを見る志保ちゃんはまだ新一を見ているのか。そう思うと心が痛くて。

「俺、子供の名前決めてきた」

「あら、なんて名前？」

「『新一』」

「……え？」

「漢字も同じで新しいにーだ」

「そんな。貴方は辛くないの？」

「微妙なところ。だけど、志保ちゃんにたくさん新一の名前を呼んで欲しいし、俺も呼びたい」

それは心からの願望だった。

「・・・そうね。じゃあ、新一で決まり」

「おう」

窓から吹き込んできた風は、新しい始まりを意味していたのかも
しれない。

*

「そして15年。今のお前がいる」

父さんは全て話終え、一息ついた。

「じゃあ、父さんは俺の本当の父さんじゃないってこと？」

「そうだ」

「工藤新一が俺の父さん？」

「ああ」

「母さんはどう思ってるの？」

「分からない」

父さんは今までで一番悲しい顔をしていた。いつも自信家な父さんでいて欲しかった。

父さんにも、母さんにも、本当の父さんにも、俺には考えられないような辛い過去があったんだ。

「だから、新一とは血が繋がってないんだよ。ごめん、騙してきて俺のことは嫌いになって構わない。ここから追い出したって良い。ただ、志保ちゃんが悪くないから。新一が志保ちゃんを支えてあげてくれ」

父さんはそう言うけど、俺は・・・

「出ていくなよ、父さん。母さんを支えられるのは父さんだけなんじゃねえか？ 俺には無理だ」

「それに．．．」と俺は言葉を続ける。

「あんまり素直に言えねえけど、俺、父さんのこと好きだぜ」

「．．．．．へ？」

「いつも母さん思いでさ。俺もいつか父さんみたいに大切な人に会えたら良いなって思うんだ。憧れなんだよ、父さんが」

「しんいち．．．」

「これ、言うの恥ずかしいんだぞ。だけど、父さんだって話してくれたから、俺も言わなきゃな」

父さんの瞳を見た。やっぱり、越えられねえな。

「父さんが父さんで良かった。工藤新一って人もイイ人だったんだろうけど、俺は父さんしか知らないから」

ニコツと微笑めば、父さんも笑ってくれた。

「ありがとう、新一」

「これから俺の父さんで居てくれよ？」

「もちろん」

父さんの部屋から出ようとした時、一つ言ってなかった言葉を思い出した。

「父さん、ありがとう」

『ありがとう』俺の大好きな言葉。

「それと、母さん多分父さんのこと好きだと思っぜ?」

それから部屋を出た。

母さんの瞳はもう、工藤新一を映してはいないと思う。だって、素直じゃない母さんが一回だけ……

『母さん。母さんが一番好きな人ってやっぱり父さん?』

確か中1の時に聞いた。そしたら、

『ええ。母さんは黒羽君が一番好きよ。愛してるの。新一もいつか運命の人に会えると良いわね』

その時の母さんは一番綺麗だった。それで俺もはやく運命の人に会いたいと思ったんだ。

やっぱり父さんも母さんも大好きだ。

＊

夜中の２時頃に眠気がやってくる。志保ちゃんもそろそろ寝る時間かと思い、彼女の部屋に向かった。

しかしそこに彼女はいなくて、もしかしたらベランダにいるかと思っただけで、予想通りに彼女はいなかった。

「まだ寝ないの？」

その背中に語りかける。

「月が綺麗だね。貴方と初めて会った日を思い出したわ」

「懐かしいなあ」

怪盗キッドなんて本当に昔の思い出だ。

「・・・志保ちゃん、俺、新一に本当のこと話したよ」

そう言ったら、彼女は驚くこともなく、「そう」と一言呟いた。

「新一はなんて？」

「『父さん、ありがとう』って」

ふふ、と志保ちゃんは笑った。

「あの子らしいわ。『ありがとうは私の大好きな言葉なの』って昔教えたからね」

「へえ」

「こうして幸せでいられるのも全て黒羽君のお陰よ。本当に私の支えだったの」

今夜の月は満月だった。その光は俺と志保ちゃんを照らした・・・

「・・・ありがとう、黒羽君」

あの時と同じ言葉だった。

今度は泣かないで、俺も笑った――

＊

「ねえ、あれ高校生探偵の黒羽新一じゃない？」

「あら、本当だわ」

道を歩いていたら世間話が好きそうなおばさん2人が俺を指差す。

「黒羽新一君？」

「そうですが．．．」

話しかけられたので、言葉を返す。

「本物よお！」

「ワタシ、黒羽志保さんの薬のお陰で死を間逃れたんです。ありがとうございます、と伝えおいてください」

「ああ、はい」

「後、黒羽快斗さん。いつまで経ってもダンディーな方よね。彼の書いた本、読んだのよ。いいお話だったわよ。確か、タイトルは．．．」

「『人を愛すること』ですよね？」

「そうそう」

俺の父さんも母さんも有名人だから、俺なんてまだあまり知られてない方なんだと思い知らされる。

「では．．．」

帰ろうとした時。

「黒羽新一君、探偵頑張るのよ」

おばさんからの言葉だったけど、本当に嬉しかった。俺を応援してくれる人もいるんだ。

「ありがとうございます！」

家まで帰る足取りは軽かった。

「ただいまあ」

2年前に引っ越してきた家に帰ると、母さんと父さんが嬉しそうに話していた。

「おう、新一！」

「お帰り、新一」

2人はいつも以上に楽しそうだ。何か良いことでもあったのか。

「何か良いことあったのか？」

「ああ、すごく良いことだ」

父さんがそう言うと、母さんが微笑んだ。

「新一はお兄さんになるのよ」

言葉を理解するのに時間がかかった。

「マジ・・・？」

「私と黒羽君の子供が出来たの」

笑顔は魔法。

何でも幸せにしてしまう。この家にはこの魔法があるから、幸せなんだ。

「ありがとう」

感謝の言葉。心温まるそれも皆を幸せにする。

—笑顔の魔法と「ありがとう」—

笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。新作ですっ！ 快志快哀の短編集作っちゃいました（*´、*´）

今回は頑張りました。だから長かったですよね、お疲れさまです。快志ってやっぱり切なくなっちゃう・・・

切ないの大好きっ（＾o＾）／ 切な快志にはまり中・・・
長いから多分誤字脱字多いんで、指摘お願いします。

てか、連載多っ（@、□、@；）！！ ぼちぼち頑張ります。
後、リクエストあったらどうぞm（――）m

嘘と告白（快志）（前書き）

快志。人はこれを手抜きという。

嘘と告白（快志）

「もしもし、工藤君？」

『おう、宮野か』

「明日会えない？」

『ごめん、明日から俺北海道に出張なんだ』

「あ、じゃあ、私も行くわ」

『そ、それは。あ、そうだ、警部に1人で行けって言われたからちよつと・・・』

「・・・そう。何時の便？」

『10時くらいだったかな？　なんで？』

「何でもないわ。気を付けて行つてらっしゃい」

『おう』

工藤君は多分何かを隠してる。私に隠さないといけないことって何？ 蘭さんのこと？

*

次の日、空港に向かった。工藤君に会えるかもしれないと思って
だけど．．．

100

「あ、蘭！ お待たせ」

「うんうん、私も今来たところだよ。じゃあ行こっか」

「おう」

工藤君と蘭さんが楽しそうに笑って旅行へ出かけるところだった。
1人って言ってたじゃない。

嘘つき．．．

＊

家に帰って1人になると、涙が溢れてきた。やっぱり工藤君は蘭さんを選んだのね……。私なんかじゃ、駄目なのよね。

「しーほーちゃん！」

窓の外から飛び込んできたのは、明るい声。工藤君と同じ声。

「黒羽君……」

窓を開けて、彼を中にいれる。

その笑顔はあまりにも工藤君に似ていた。別人だと分かっているのに。

「うっうっ……」

「ちょ、志保ちゃんどうしたのっ？」

心配そうに彼は私の顔を覗き込んできた。

それから私は今日あったことを黒羽君に全て話した。

「そんなことがあったんだ・・・」

私は何も言わず、コクリと頷いた。

「それは工藤が悪い。確かに本当のことを言ったら、志保ちゃんは傷付いたかもしれないけど、志保ちゃんに嘘を付くなんて許せない」

黒羽君は真剣な瞳でそう言った。

「・・・ありがとう」

「んじゃ、俺は帰ろっかな？」

「何のために来たの？」

「志保ちゃんが泣いてるような気がしたから。でも、もう大丈夫でしょ？」

黒羽君って超能力者なのかしら？ 私が泣いてるような気がしたって・・・。

「そんじゃ、また」

分からないけど、そんな彼に私は惹かれて。身体が勝手に動き、彼の左腕を掴んだ。

「．．．か、ないで」

「．．．？」

「行かないで．．．」

私はもう、工藤君が無理だと分かった時から黒羽君のことが好きだったのかもしれない。今更気付いた。

黒羽君の左肩にそつと顔を埋める。

「．．．志保ちゃん？」

「分からないの。もしかしたら、私、貴方のこと好きなのかしら．．．？」

「．．．それは、俺にも分からない。だけど、好きだと思うなら、好きなんじゃない？」

彼はすつとこちらを向き、私の背中に腕を回した。

「・・・俺は志保ちゃんのこと、好きだよ」

嘘と告白（快志）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。
THE 手抜き＼（＾o＾）ノ たまにはこーゆーのも良いよね・
・なんて。書きたかったのは、ちよつと快斗に甘える志保ちゃん。
工藤君好きだと信じてて黒羽君への想いに気付けない感じの志保ちゃんが好き。
もちろん、快斗は志保ちゃんにぞっこん。

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）（前書き）

リクエストあったので、今更ですが続編です。快志でらぶらぶして欲しかったの。

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）

工藤君と黒羽君を重ねて見ていた。だけどいつからだろう、黒羽君を愛すようになったのは・・・

「ねえ、母さん。どうして父さんだけ名字が違うの？」

星空が綺麗な日。

新一が中1の頃だった。一番恐れていた質問。教えるわけにはいかなかった。

「・・・もう少し、新一が大人になったら教えるわ」

「何だよそれえ」

ちょっと新一は拗ねた。日に日に彼は工藤君に似てくる。生まれ変わ리かと思うくらいに。

「母さん」

「何？」

「母さんが一番好きな人ってやっぱり父さん？」

そろそろ恋愛したい年頃なのかしら？

正直、戸惑った。多分、少し前なら「母さんは他に大好きな人がいるの」と答えていただろう。

だけど、最近黒羽君のことが好きだと感じている。ずっと私の側に居てくれて・・・

「ええ。母さんは黒羽君が一番好きよ。愛してるの。新一もいつか運命の人に会えると良いわね」

そう言えた。

昔は黒羽君を工藤君と重ねていた。だけど、いつからか、黒羽君を見るようになった。

いつまでも工藤君が好きでいたかったけど、私の気持ちは変わっていった。

「新一は好きな子とかいないの？」

「へ．．．？　ば、バーローいねえよ！！」

赤面して新一は答えた。

「何照れてるのよ？」

「……っ」

息子をからかうのは少し楽しかった。

その照れ方が工藤君にどこかにていて、少し胸が痛んだ。

「……母さん？　泣いてんの？」

新一に言われて、目頭が熱くなってきたことに気が付いた。
馬鹿。何泣いてるのよ？

「ただの欠伸よ」

窓の外を見て答えた。新一の顔は、見れない。

「さあ、もう寝なさい。明日朝早いんでしょ？」

「うん」

新一は多分深入りしてはいけないという空気を感じたんだと思う。
それ以上は聞かないで、部屋に帰っていった。

「・・・工藤君」

久しぶりに言った名前は懐かしかった。涙が溢れてきた。ずっと私を愛してくれて、最後の最後まで私のことを考えてくれた人。

夜空に輝く星を見た。一番輝いているのが彼の星だと決め付け、それに向けて言葉をかけた。

「工藤君、私は今でも貴方を愛してるわ。だけど、私のことを救ってくれた黒羽君のことも、愛してる。まだ、彼には言えないけど。後何年か経ったら、この気持ち、彼に伝えて良いかしら？」

工藤君なら、なんて答えるかしら？

多分、許してくれると思う。彼は優しいから。私が決めたことならって。

「・・・くどう、くん」

だけど、やっぱり忘れられない。あんなに愛していた人を簡単に忘れられるわけがない。

涙は止まらなかった。

そう言えば、何年もの間、こんな風に彼を思い出すことはなかった。それは黒羽君と新一のお陰だと思う。

「．．．志保、ちゃん？」

声がした方を向くと、黒羽君がいた。

「どうしたの？」

優しく声をかけてくれる。そんな彼が好きなんだって改めて思う。

「．．．工藤君をね、思い出したの」

「そっか」

「新一が、本当に工藤君に似てきて．．．正直辛いわ」

「うん」

頷きながら私の話を聞いてくれる。

「．．．貴方は辛くないの？ 私の隣に居て」

「辛くないって言ったら嘘になるかな？ だけど、志保ちゃんに心配かけたくないから」

と、笑顔で言った。またそういう優しいところに私は惹かれる。

初めは工藤君と重ねて見ていた。黒羽君は工藤君なんだと勝手に

思い込んでいた。だけど、いつからかは黒羽君を見るようになった。

変わったんだと思う。私は。

「ほら、泣かないで志保ちゃん。新一は泣いて欲しいなんて思わないよ」

「・・・そうね。でも、思うように止まらないの。ねえ、黒羽君、」

「何？」

工藤君と似た優しい瞳。だけど、それは黒羽君のもの。

「…………抱き締めて？」

柄でもないことを言うな、と自分でも思った。

昔の私、組織にいた頃の私だったら、こんなことは口が裂けても言わないだろう。今が平凡なことなんだろうか。

「・・・だけど、新一に悪い、」

悲しげな顔でそう彼は言った。

「馬鹿ね。工藤君のことは気にしなくて良いのよ。私の頼みを聞けないの……？」

「んなことねえよ。抱き締めたいし、キスだってしたいし、もっと志保ちゃんに触れたい」

顔を赤くして、だけど真剣な瞳で彼はそう言った。どくん、と胸が高鳴る。

首の後ろに手が回されて、抱き寄せられる。すぐに私の顔は彼の胸に埋まった。

「ずっと、こういう風に抱き締めたかったんだぜ」

耳元で囁かれた。ぴくりとその吐息に身体を震わす。……黒羽君ってこんなに大人だったの？

「泣き止んで、志保ちゃん」

大きな身体で私を包み込む。

そう言えば、工藤君との結婚が決まったとき、キスされて抱き締められたっけ。

温かい。工藤君とは違う、改めてそう思う。別人なんだって。

「……ありがとう、黒羽君」

助けてくれて、ありがとう。
側にいてくれて、ありがとう。
慰めてくれて、ありがとう。

色んなありがとつを黒羽君に伝えたい。

「志保ちゃん、顔上げて？」

そう言われたので、顔を上げた。目の前には黒羽君の顔。一瞬、唇に何か触れた。

それが彼の唇だと気付いた時には、もう彼から解放されていた。一気に顔の熱が上がる。

「ふうん。志保ちゃんもそんな顔するんだあ。可愛いじゃん」

得意気に彼は言った。ニツと白い歯をこちらに見せる。

「おやすみ、志保ちゃん」

そう言って楽しそうに彼は自室へ行った。

*

新一に全てを話してから、1週間ほど経った。新一は前と同じように俺と接してくれた。それが嬉しかった。

新一に言われた言葉をずっと考えていた。だから、今日こそ聞いてみる。

——志保ちゃんは今、誰を想ってるのか？

深夜、志保ちゃんの部屋のドアをノックした。

「志保ちゃん、入るよ」

「どうぞ」

ドアを開けると、ベッドに座って志保ちゃんはファッション雑誌を見ていた。

「もう1時過ぎよ。何の用？」

志保ちゃんの前の床に腰を下ろす。

「聞きたいことが、あつてさ」

志保ちゃんを前にすると口を閉じてしまう。フラれるのが、怖いのかもしれない。

「何？」

「あのさ、」

いつか聞かないといけないことだから。

「……今、誰を想ってるの？」

率直な質問に志保ちゃんの瞳は揺れた。

志保ちゃんの口が徐々に開く。

「…………貴方よ」

ゆっくりと彼女は笑顔でそう言った。

理解出来なかった。志保ちゃんが、俺を想ってる？ 何かの聞き間違え？

「今、なんて？」

「愛してるの、黒羽君を」

確かに志保ちゃんはそう言った。

「……本当？」

「ええ」

「今更嘘なんて言わない？」

「言わないわよ」

「新一は……？」

「工藤君のことも、愛してる」

「……だよな」

その言葉を聞いて少し落ち込んだ。

「でも、一番は黒羽君だと思うわ」

「……え？」

「いつも私を支えてくれて。そんな優しい貴方に私は惹かれたの。愛してる、心から」

その言葉が聞けることをずっと夢見ていた。叶わない夢だと思っていた。だけど、叶った。

「俺も、ずっとずっと前から、志保ちゃんのこと愛してる」

伝えたかった想い。

『愛』って、こんなに温かいんだ。

ぎゅっと彼女を抱き締めた。

「これからは、志保ちゃんは俺だけのものってことだよな？」

「……工藤君みたいなこというのね」

「男だから。1人じめしたい、志保ちゃんを」

「良いわよ。貴方だけのものになっても」

甘い声で彼女は言う。

ねえ、そんなこと言われたら、俺、止まらないよ？

「……志保ちゃんのせいだからな。俺が止まらなくなっても、文句言っなよ?」

「はいはい。ご自由に。私もそれが本望よ?」

クスリと笑う。

ああ、もう無理だ。止まんねえや。

ずっと我慢してきたんだ。志保ちゃんに触れたくても、頑張っ
てその気持ちを殺して今日まで来たんだ。

今日はその、ご褒美ってことだよな?

彼女の身体をベッドに押し倒す。

荒々しく唇を塞ぐ。彼女の喘ぎ声を聞くと、もう現実には戻れな
くなった。それから彼女に触れる。

「愛してる・・・」

何度も何度も彼女に言った。

2人の間に子供が出来るのは、もう少し後のお話。

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）（後書き）

快「志保ちゃん俺のものにしちゃった。新一、怒ってるよな」
志「そうね」

快「ま、いつか。志保ちゃんが望んだことだしな」

→何がしたいんだw

どうも、雛花です（^ω^） 最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

快志はお久しぶりだ。らぶらぶさせ過ぎたかもしれない。志保ちゃんがちょっと志保ちゃんじゃないよね。甘えたいお年頃なのかな。

原作でもっと哀ちゃんとキッド絡めよ！ 喋ったの一回だけじゃね？

今日活動報告書くよ（*´、`*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0313w/>

怪盗と科学者

2011年10月10日10時26分発行